

ADVANレーシングタイヤインフォメーション

2008年 SUPERGTシリーズ第2戦

2008.4.13

OKAYAMA GT 300km RACE



横浜ゴム(株)が「ADVAN」ブランド誕生から、ちょうど30年目となる08年にチャレンジするカテゴリーのひとつがSUPER GTシリーズだ。全9戦で開催され、海外のサーキットも舞台とする国内最高峰のシリーズにおいて、ADVANはGT500クラスに出場するTOYOTA TEAM TSUCHIYA、そしてKONDO RACINGとのパートナーシップを継続。それぞれ表彰台の中央を目指す。

TOYOTA TEAM TSUCHIYAは土屋武士、そして新たにルーキー石浦宏明を起用してECLIPSE ADVAN SC430を、また昨シーズンのセパンラウンドで優勝を飾っているKONDO RACINGは、引き続きジョアオ・パオロ・デ・オリベイラと荒聖治のコンビで、WOODONE ADVAN Clarion GT-Rを走らせる。

第2戦の舞台である岡山国際サーキットは、SUPER GTが行われるコースとしては最もコンパクトな部類に属すテクニカルサーキットだ。ストップ&ゴーが繰り返され、ブレーキングの頻度はツインリンクもてぎに次いで多い。しかし、それ以上に重要なポイントは季節柄、このコースには黄砂や花粉の飛来が極めて多いことが挙げられる。そのため、決勝レースの頃にはかなり落ち着くものの、金曜日の走り始めは非常にダスティで、タイヤの摩耗も著しい。今回、用意されるのはGT500、GT300両クラスともソフト、ミディアムの2種類ながら、選択においては単純に温度域ではなく、そういった要素も加味されることになる。

開幕戦の鈴鹿では、WOODONE ADVAN Clarion GT-Rが5位でゴールし、上々の滑り出しを見せた。3月26~27日に富士で行われた公式テストにおいても好結果を残し、なおかつGT-Rがフロントの回頭性の良さを特徴としているだけに、岡山でも引き続きの活躍が期待される。一方、ECLIPSE ADVAN SC430は鈴鹿でこそ、入賞まであと一步の11位に甘んじたものの、回り込むコーナーを得意としており、岡山との相性も良いこともあり、2台揃っての入賞も決して不可能ではないはずだ。また、富士の公式テストで構造にマイナーチェンジを行ったところ、フロントの旋回性が向上。そのことも期待に拍車をかける要素である。

GT300クラスにおいては、鈴鹿でORC雨宮SGC-7が久々の優勝を飾り、これにプリヴェKENZOアセット・紫電とコンケルパワータイサンボルシェ、ダイシン ADVAN Zが続いて上位独占を果たすこととなった。その好結果をふまえ、ほぼ前回と同じ方向性のタイヤが持ち込まれる。これら4台、4車種の岡山との相性は過去のデータでも良いことが確認されているだけに、引き続き活躍が期待される。



なお、前述のとおり路面状況にも大きく影響されるものの、基本的な温度対応はGT500クラスの場合、路面温度が30度以上ではミディアムが、それ以下ならソフトが使用される。GT300クラスのボーダーは35度。今回は約1400本のADVANレーシングタイヤが用意される。



2008年 SUPERGTシリーズ第2戦用ADVANTイヤラインアップ

		GT500	GT300
ドライ用 スリック	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S、M)	2種類 (S、M)
	サイズ	330/710R18、330/710R17	280/710R18、280/680R18、280/650R18
ウエット用 レイン	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S、M)	2種類 (S、M)
	サイズ	330/710R18、330/710R17	280/710R18、280/680R18

30th
ADVAN
Since 1978

ADVANとともに戦うWTCC:世界ツーリングカー選手権



現在、FIA(国際自動車連盟)の統括で開催される世界選手権は3シリーズしかないが、そのうちのひとつがWTCCこと世界ツーリングカー選手権である。世界12カ国を股にかけ、市販車によって争われる世界の頂点シリーズは、今年10月に初めての日本ラウンドを岡山国際サーキットで開催することとなった。このシリーズに06年からオフィシャルタイヤとして、全車に供給されるのが横浜ゴムの「ADVAN」レーシングタイヤである。

このシリーズに出場するのは主に4車種。WTCC初年度の05年から3年連続で、ドライバーズ/マニュファクチャラーズ両タイトルを獲得しているのはBMW320siで、対抗馬として引き続き姿を見せているのが、セアト・レオンとシボレー・ラセッティだ。なお、セアトはディーゼルターボのTDIエンジン搭載車も昨年から投入しており、その着実な進化はライバルの脅威に。また、アルファロメオ156からホンダ・アコードにスイッチしたチームもあり、そのことも大いに話題となっている。

これらのマシンは「スーパー2000」規定に基づき製作されており、空力パーツの変更が最小限しか認められていないため、昨今のSUPER GT車両を見慣れた目には大人しく映るかもしれない。しかし、わずか2000ccのエンジンから280馬力が絞り出されることから明らかなように、その中身は完全なレーシングバージョン。駆動方式やエンジン搭載方法、サスペンション形状を変更することが認められていないものの、細かいチューニングが許されている。また、2輪駆動車に限定されているのも特徴のひとつ。

駆動方式だけでなく、個性も異なる車両すべて、さらにあらゆるコンディションやコースに対応できるタイヤの開発には苦労を要したものの、横浜ゴムはさまざまなカテゴリーで得てきたデータやノウハウを総動員。その結果、性能も信頼性も高い評価を受けるタイヤを供給できるように。「ADVAN」とともに激戦を繰り広げるWTCCに、今後はもっと注目して欲しい。

シリーズこれまでの経過

WTCCは、ここまでブラジルとメキシコで、それぞれ2戦ずつ計4戦を終了。優勝はいずれもセアト・レオンTDIで飾られており、第4戦にいたっては1位から5位までを独占している。ウィナーもすべて入れ替わっているのだが、目下ランキングのトップに立つのは未勝利のリカルド・リデル。かつて全日本F3を戦っていたドライバーの安定感が目立っている。また、連覇を目指すBMWのアンディ・プリオールは、第2戦の2位がこれまでの最上位でランキングも5位に留まっている。

GT300ルーキーにインタビュー

山野直也/プロムマツハ号320R



©GTA

やまの・なおや
1977年9月7日生まれ、東京都出身。ジムカーナを19歳から始め、01年には合わせてレースにも挑戦するように。翌年からはインテグラ、そしてアジアツーリングカー選手権にも出場。スーパー耐久には06年から参戦し、この年STクラス4でチャンピオンを獲得。07年にはSTクラス1でランキング3位となる。今年はGT300の他、昨年から始めたD1ストリートリーガルにも出場。普段はプロジェクトMの社員としてパーツの開発に努める。山野哲也はひとまわり違う兄。

本物のマツハ号は知りませんが、何とかGTでもやっていけそうです!

——ようやく念願のSUPER GTにステップアップできました。最初の印象は?

山野「ヴィーマックのシフトは右だったんですよ!勝手に左だと思いついていたので(笑)。それはともかく、第一印象は運転しやすく、すごく乗りやすかったです」

——ヴィーマックはフォーミュラっぽいと聞きますが、今までハコの経験しかない直也選手には……。

山野「確かにフォーミュラ出身のドライバーの方がすぐに乗れそうだな、という感じでした。でも、ジムカーナで山野哲也のNSXに乗ったことがあるんですが、あれに少し似ていましたね、もちろん次元はもっと高いところにあるんですが。なので、ものすごく戸惑ったってことはなかったですね」

——開幕戦を終えての感想は?

山野「ポジションを落とさずに完走することが目標だったので、それはクリアできて良かった。あと、GT500との速度差が不安だったんですが、なんかノリ的にはスーパー耐久の『僕は4クラス、500は1クラス』という感じの速度差だったので、そんなに戸惑いはなかったですね。むしろ500のドライバーは、レベルの高い方たちばかりなので信用し切って、僕がこっちに行きますよ、という意味表示さえしていれば、間違いが起きることはないレースだな、という感じはしました」

——どうやら、やっていけそう、という手応えを得られたようですね。

山野「それはもちろん。ただ、鈴鹿ってコースが長くてクルマも散らばるから、そんなには忙しくなかったんですが、岡山とかSUGOIは道幅も狭いですし距離も短いので、そのへんはまだ不安です」

——逆に言うところの岡山ラウンドを乗り切れば、違った局面に入れそうですね。あと、『スピードレーサー』という映画が上映されることになって、よりマツハ号も注目されそうですね。

山野「実はすいません、本物のマツハ号って知らないんですよ(笑)。僕にとってマツハ号は、このヴィーマックが初めてみたいなもので、皆さんとの変なギャップはあるんですよ」

——う、世代の違いが……。それはともかく、兄弟で同じレースに出るのはもしかして初めて?

山野「ジムカーナではダブルエントリーしたこともあるんですが、レースでは初めて。僕がモータースポーツ始めた頃には、向こうはもうGT乗ってましたし、スーパー耐久ではダブっていないんですよ。そういえば、鈴鹿で初めて1回だけ抜かれたんですけど不思議な感じでした。思わず覗き込んだりしました。『あのヘルメットは哲也だ、ペースが全然違う、今度はぶっちぎってやる』ってね(笑)」

